

フェミニズムは誰のもの？

—女性嫌悪発言から見る現代韓国社会—*

李 聖 娥

1. はじめに

嫌悪とは何か。一般的に、それは憎しみきらいことであり、何かの対象に対して強い不快感を持つことを指す(大辞泉, p. 1154)。今年、韓国では「女性嫌悪」という言葉が社会に強い反響を呼んだ。女性嫌悪に対する議論は、この春、ある男性芸人と人気アイドルが女性を辱める発言をしたことから、急速に過熱した。彼らのあまりにも度を過ぎた発言に怒りを覚えた人々は、彼らが出演しているテレビ番組のインターネット掲示板に彼らを除名するように訴えた。それからニュースや雑誌など、多くのメディアから「女性嫌悪」というキーワードが頻繁に取り上げられた。また、インターネット上では、常に女性嫌悪を巡る口論が絶えず、更には、女性による男性嫌悪も現れはじめ、男女がお互いのことを嫌い合っていることが現状である。

ユン(兪, 2015)は、現在の韓国社会における女性嫌悪現象に対して、少しでも「反女性的」だと見なされるすべての現象は「女性嫌悪」というフレームに含まれると指摘する。「反女性的」であることは日常の小さい行動から暴力まで、様々な形で現れるが、本稿では「発言」に焦点を当て女性嫌悪を考察する。そして、女性嫌悪発言が盛んに発せられている原因として、インターネット社会と現実社会の相関関係、韓国社会に根付いている価値観、経済不況などを踏まえた上で、これらの複合的要素が、男性が感じる「逆差別」にどのような影響を及ぼしているかに着目する。そして、その「逆差別」と韓国社会に拡散しているフェミニズムに対する認識が、どのように関係しているのかをも明らかにしたい。最後に、韓国社会がフェミニズムに対して持つべき姿勢とは何かについて論じる。

* 社会科学総合学院花光里香准教授の指導の下に作成された。

2. 韓国社会の中の女性嫌悪

2-1. インターネット上での女性嫌悪

現在、韓国で女性嫌悪発言が最も目立つのは、インターネット上である。インターネット上では、たとえ根拠がないとしても噂が真実のように伝わり、匿名性と表現の自由を盾にした嫌悪発言は何の制御もなく急速に拡がる。例えば、ある番組で一般人女性を対象に結婚観に関するインタビューを行った。しかし、インタビューの対象となった女性の本当の発言とは違い、インターネットに広まったスクリーンショット上の彼女は、結婚後は男性に経済的に依存し、楽に生きたいと考える女性となっていた。その女性の顔が映った番組のスクリーンショットはインターネット上に広まり、彼女は強く批判された。後からそのスクリーンショットは誰かの悪意によって操作されたものと判明したが、謝る人はほとんどいなく、異なる女性を対象に同じことが繰り返されている。インターネットの影響力は日々強くなり、現実世界への浸透の速度もまた日々速くなっている。「女性嫌悪」と呼ばれる「反女性的」考え方そのものは昔から韓国社会に存在していたが、インターネットの発達とともにより制御不能なものになった。

2-2. 日刊ベストの存在

「女性嫌悪」を語る際に、欠かすことのできないインターネットコミュニティがある。「日刊ベスト」（以下イルベとする）だ。2012年の大統領選挙後に急速に膨大化したこのコミュニティは、当初は主に政治について話し合い、強い保守的思想を持つ人々が集まるコミュニティであった。従来のコミュニティと異なる点は、イルベは誕生した時から、女性ユーザーを排除する傾向が強く、女性ユーザーは自分が女性であることを表明してはいけないという規則が存在することである。これによって、イルベは男性中心のコミュニティになったと推測できる。実際、2013年、イルベのユーザーの性別を調査したところ、男性が75.8%、女性が24.2%と男性が過半数を占めていた（東亜日報デジタル2014年2月12日）。そして、男性中心のコミュニティである上に、表現の自由を標榜していることから、極端な女性嫌悪の発言も許される雰囲気を作られたと考えられる。

イルベで使われている女性嫌悪の表現は数多く存在するが、その中でも、最も代表的な言葉は「キムチ女（김치녀）」であろう。시사IN（2015年9月12日）では、「キムチ女」を恋愛市場で人柄や愛ではなく、男が所有している 자원（資源、すなわち財産、家柄、容姿など）で男の価値を判断し、自分が持っている以上のものを得ようとする女性であると定義した（p.17）。イルベから派生した「キムチ女」という言葉は、今ではイルベだけでなく、あらゆるポータルサイトや男性中心のコミュニティーでも使われるようになった。例えば、多くの人が実名を名乗り、現実世界での知り合いとつながることが特徴である

Facebookにも「キムチ女」は登場する。「キムチ女」という名のページには17万人にも上る人々が「いいね」をしている。「キムチ女」ページの管理者によると、キムチ女ページはイルベと違い、女性嫌悪ではなく男性人権を訴えるために作られ、「キムチ女」は韓国の「一部」の「無概念女(무개념녀)¹⁾」のことを指す言葉であるという(etoday 2015年8月5日)。しかし、その「一部」を規定する客観的基準は存在するのだろうか。人々はそれぞれの主観によって「キムチ女」であるかないかを判断し、自分が発している言葉は「女性嫌悪」発言ではないと信じ込む。そのため、「キムチ女」ページには管理者の意図とは異なり、それぞれが考える「無概念女」=「キムチ女」を非難する言葉が飛び交っている。

2-3. 「〇〇女」

女性嫌悪発言はインターネット上だけの問題であると言えるのだろうか。今の時代、現実世界とインターネット世界を完全に切り離すことはできないと言えよう。実際、現実世界で使われる言葉とインターネットで使われる言葉を区分することは無意味になりつつある。韓国では「〇〇女」という言葉をよく目にする。既に上記で触れた「無概念女」をはじめ、その反対の意味を持つ「概念女(개념녀)」、「カンナム女(강남녀)²⁾」、「キムヨサ(김여사)³⁾」、「味噌女(된장녀)」などがその例であり、これらのほとんどがインターネットで誕生したが、今では日常生活で人々が口にする言葉である。その中でも、「味噌女」は「〇〇女」の出発点と言っても過言ではないほど、社会に大きな反響を及ぼした言葉である。味噌女という言葉の由来に関しては、様々な説が存在し⁴⁾、明確な由来を知ることはできないが、金と崔(김·최, 2009)によると、2005年、ある週刊誌にスターバックスのコーヒーにはまった20代・30代の女性に関する記事が掲載されて以来、世間に広く認知されるようになったという。町中に溢れるコーヒー・チェーン店や日々増加するコーヒーの消費量からわかるように、今ではコーヒー・チェーン店のコーヒーを飲むことは日常的なシーンになった。しかし、およそ10年前は、食費に相当するお金を払ってコーヒーを飲むという発想はあまりなかったため、若い女性が高いお金を払ってスターバックスコーヒーを飲むことは、目立つ行為であった。更に、高いコーヒーや海外ブランドのバッグを消費するのは自分の経済力ではなく、親や男性の経済力に依存していると強く非難され、味噌女と呼ばれるようになった。しかし、時が経つにつれて、この言葉が持つ意味は徐々に変化し、今では、自分の経済力で高価な物を消費する女性のことも味噌女と呼ばれるようになった。ここで注目しなければならないことは、同じ消費の主体であるのにもかかわらず、高価な車や時計を消費する男性は憧れの目で見られる一方、女性がブランドものを買うと浪費とみなされ批判されることである。何故、性別によって浪費かどうかを判断する基準が異なるのだろうか。それは、男性は女性が経済力を持つ消費の主体になることを嫌

がるからではないだろうか。女性が完全なる消費の主体になれないことには、韓国社会に強く根付いている「家父長制」が関係していると考えられる。

3. 家父長制の崩壊と経済不況

3-1. 韓国の家父長制

朝鮮時代後期から現在に至るまで、韓国社会は国家理念として成り立った儒教の強い影響下で、強い家父長制を保ち続けてきた。金と崔 (김·최, 2009) によると、家父長制は歴史以前の時期から今日に至るまですべての社会体系と家族形態の根幹を構成し、更には、女性の地位と人生を決定する最も核心的な制度であるという。強い家父長制の影響下にあった韓国では、1980年、産業化の進展とともに、「専業主婦」という概念が社会に定着した。専業主婦は、家事という労働はしているものの、その労働は給料が発生しないため、主婦の女性はあくまでも夫の経済力に依存せざるを得なかった。つまり、完全なる消費の主体になりえなかったといえよう。しかし、80年代、開発独裁や軍事政権、それに抵抗する民主化運動が起こった激動の時期を経て、民主化を図るとともに社会における女性の立場も変わりはじめた。

3-2. 女性権利の向上

1991年国連の会員国になった韓国は、国際社会の影響をより一層受けるようになった。したがって、女性の社会参加に注目が集まり、それまでとは異なる女性のライフスタイルが提案されるようになった。ここ十数年で、韓国女性の教育水準は徐々に上昇してきた。統計庁が発表した『2014年韓国の社会指標』によると、今では、女性の大学進学率が74.6%で、男性の67.7%より上回っているという。それに伴い、女性の社会進出もより活発になった。しかし、理由は教育水準の向上だけではなかった。朴と山根 (2007) によれば、「男性は仕事、女性は家事」という性別による役割分業に対する態度が強く残っているが、経済危機によって、生計維持者1人の家族では生活することが難しくなり、現実の生活では家計補充のため、子どもの養育費のため、更には生計のために、女性のほとんどが仕事をするようになったという。つまり、自分の意思であろうが、環境の変化によるものであろうが、女性労働者の割合は増加した。したがって、それまで経済力を握っていたのは夫・父だけであったが、女性も経済活動をすることで経済力を手に入れ、消費の主体になれるはずであった。しかし、経済力を手に入れることは、(家の)権力を握ることになり、つまりそれは(家族の中の)決定権をも握ることを意味する。しかし、依然として家父長制は韓国人の価値観や生活に根強く浸透しているため、女性が決定権を手に入れることはなかなか難しいことであった。家父長制の中では、女性は夫や父親など家長に従順

で、家と家族を守る「女性像」を強いられる傾向がある。例えば、韓国の女性を誹謗する言葉である「キムチ女」の比較対象として、韓国人男性の勝手なステレオタイプであるが、男の言うことに従順で愛嬌のある日本人女性を「寿司女」と呼び賞賛することは、韓国社会は未だに女性に対して家父長制の「女性像」を求めていると言えよう。ジョン(정, 2015)は、女性の役割について、次のように述べている。

家父長制社会で期待(強要)される女性の役割は男性の道具になることである。女性の体が遂行しなければならないのは、言語ではなく、男性、家族、国家のための労働である。この規範は絶対的である。この規範を疑問視したり、断る女性に科される刑罰は、火刑、強姦、殺人のように様々であった。(p.96)

現代に入ってから火刑や殺人のような処罰はほとんど見られなくなったが、DVを含む女性に対する暴力は依然として存在している。しかし、フェミニズム運動の展開とともに、愛という名で暗黙のうちに容認されてきた恋人或いは妻に対する暴力は問題視され、処罰の対象となった。したがって、肉体的暴力が容認されない現在、家父長制の規範を疑問視し、拒絶する女性への刑罰は、正に今の韓国社会に蔓延する「女性嫌悪発言」、つまり「言語の暴力」なのではないだろうか。

3-3. 青年を苦しめる経済不況

1997年のアジア通貨危機までは、韓国では大学を卒業すれば、就職は決まっているようなものであった。しかし、通貨危機以来、韓国社会はなかなか経済不況から抜け出せず、2008年のアメリカ発の金融危機の後、就職難や所得の両極化も日々深刻化している。今年、韓国統計庁が発表した青年失業率は9.7%であるが、韓国経済研究院が今年の1月から8月の間、青年層(15~29歳)を対象に実施した調査によると、青年層の体感失業率⁵⁾は22.4%に昇る。その中でも、大学以上の高学歴の男性の体感失業率は27.9%で最も高い(連合ニュース 2015年10月25日)。名門大学を卒業すれば、安定した職業に就けるといふ希望を抱いて、十数年間すべてを勉強に注ぐ。名門大学に入学後も、成績管理や資格取得はもちろん、語学留学までしたもの、就職先は決まらず希望と期待は裏切られる。フックス(2003)は、「増える失業率や報われない仕事、そして女性の階級的権力が増えていることは、裕福でも権力者でもない男性たちが、自分たちの居場所を確かめることを困難にさせている」と述べる(p.128)。イルベのユーザーの主要な年齢層は10代中盤から30代中盤であり、その中でも、20代が最も多いと言われている(ohmynews 2015年10月1日)。イルベユーザーの主要年齢層と、どの世代よりも経済不況の影響を多く受けている世代が一致することを見逃してはいけないうらう。ユン(윤, 2015)は、「男性が持っていて当た

り前の『資源』を女性が何の対価も払わずに持っていくという設定は、経済危機を克服できるという希望すら残っていない状況でとても効果的な力を発揮する」と述べている (p. 22)。男性が持っていて当たり前の「資源」とは何であり、女性はどのような方法でそれを何の対価も払わずに持っていけるのだろうか。

3-4. アファーマティブ・アクションと逆差別

その論議の中心には「女性家族部」が存在する。女性家族部は、女性の権益増進と地位の向上、青少年の保護・支援を目的としている政府機関である。2001年女性部として新設され、何度かの改編を経て、2010年女性家族部として定着した。伊藤(2009)は、生理学的な性差をふまえた男女の対等な関係の構築が必要であり、そのためには、女性の妊娠・出産という生理学的機能を「配慮」した政策が必要であると主張する。また、こうした「配慮」は、逆差別などではなく、平等を実現するための前提条件であると言う。しかし、韓国では以前から、女性の「妊娠・出産」と男性の「兵役」は相応するものという論理が存在し、女性が妊娠・出産をする代わりに、男性は兵役に約2年という時間を捧げているため、女性だけを配慮した政策は公平ではなく、「逆差別」であると主張する世論が存在する。そもそも、韓国では女性が社会的マイノリティであるという理解が欠けている。構成員の数だけを考えれば、女性は男性と同様に、世界の半数を占めるマジョリティである。しかし、男性中心の社会構造の中で、女性の社会的影響力は男性のそれより弱く、社会的差別—あまりにも日常化していて、差別とは認識されないことも多く存在する—を受けている社会的マイノリティであることは否めない事実である。このように「逆差別」として認識されている韓国の積極的優待措置だが、真に女性のための政策と言えるのだろうか。パク(박, 2011)は、「韓国の女性学者の多くが、韓国の社会福祉制度は男性が生計の扶養者となり、女性は家事担当者でありながら、経済的被扶養者となる家族類型をモデルにしているため、福祉国家であるとしても、女性に対する抑圧は続く」と指摘している (p. 360)。これは、韓国で女権拡張が進む際に、多く影響を受けていた「グローバル女性人権」のフレームと関係していると考えられる。パク(박, 2011)は、「『グローバル女性人権』のフレームが女性人権を保護するための国家の責任性を優先しながら女性人権運動の自律性の減少を招いたために、それによって「女性人権」の談論は、民主化以降でも存続する家父長制的支配のヘゲモニーに抵抗する“対抗ヘゲモニー”になりうる政治的戦略として機能することが難しかった」と述べている (p. 70)。

4. フェミニズム

4-1. 立ち上がる女性たち

韓国社会で女性が性的な話題の対象となり、貶されることは最近に限った出来事ではない。長い間、あらゆるところで女性が貶される場面は多く目撃されてきたが、それに対して女性から不満の声は上がったものの、その不満を何か行動に現すことはあまりなかった。しかし、ホットポテト (hot potato) であった女性嫌悪の問題に、今、韓国の女性たちは真正面から向き合っている。これまでは、韓国社会においてフェミニストという単語には否定的なイメージが含まれていた。それは男性だけではなく、女性の中でも変わらなかった。しかし、今現在、多くの女性は自分自身がフェミニストであること表明し、まるで「フェミニズムブーム」が起きているように見える。皮肉にもこのフェミニズム運動が起こるきっかけを提供し、拡散を促したのもまた「インターネット」であるといえよう。インターネットが普及する前も、テレビニュースや新聞などで、国外の情報は発信されていたものの、限られた時間にしか情報に接することができなかった。しかし、特に若い世代において高い利用率が見られるインターネット上では、常時、より容易に情報に接することができる。更に、スマートフォンが普及してからは、ニュースアプリケーションを通して簡単にニュースにアクセスできるようになった。また、ニュースだけでなく、SNSなどを通して、よりリアルな事情を聞くことができるようになり、女性たちは自分たちがどのように搾取され、抑圧されているかに気付いたのである。

4-2. メガリアン

いわゆる「女性嫌悪」に対抗する様々なアクションの中で、最も極端な動きを見せているのが、今年の5月に誕生したインターネットコミュニティの「メガリア」である。メガリアのユーザーたちは自らのことを「メガリアン⁶⁾」と呼び、オンラインを中心に活動しながら、韓国社会が構造的に持っている女性差別と女性嫌悪に対抗し、それを改善することを目標としている (メガリア)。オンラインでの活動が主ではあるが、オフラインでも慰安婦問題の解決やソラネット (소라넷)⁷⁾の完全なる撤廃のために積極的に動いている。しかし、メガリアの活動において、最も世の中からの注目を浴びているのが、イルベを対象に実施している「ミラーリング (mirroring) 戦略」である。このミラーリング戦略は、イルベが女性を対象にやってきたことを全く同じ形で男性を対象に行うことで、男性がどれだけひどいことをしてきたかを見せることを目的としている。メガリアでは韓国男子のことを「シプチ男 (ষ치남)⁸⁾」と呼び、イルベ等に掲載された女性嫌悪の掲示物の中の女性を男性に変えて再掲載する。この行動は世間にとって「男性嫌悪」として認識されているが、メガリアンたちは、これは男性嫌悪ではなく「女性嫌悪を嫌悪する行動」と定義

づける。

今日、メガリアンが見せる方向性は、1970年代にアメリカで起こった男性解放運動の展開と似ている。アメリカで展開された女性運動の内容は様々であったが、その中には、男性であること自体を否定するフェミニストも存在した。フックス (2003) によれば、そのようなフェミニストたちは、わたしたちすべてを抑圧者か非抑圧者に分類することで、男性と女性とを対立的に二分化しようとした。このようなフェミニストの姿は、少数であったのにもかかわらず、家父長主義的なマスメディアによって全国に伝えられ、それに反感を持った男性によって女性を敵視するような男性運動が起こった。一方、韓国では、一部に過ぎないイルベの極端な女性嫌悪がメディアを通して拡散され、それに反感を持った女性によって男性を敵視するような女性運動（反男性運動）が起こっているように見える。アメリカの男性運動が女性運動の最も否定的な要素をなぞってきたように、メガリアンが行っている女性運動は、女性嫌悪として認識されている男性運動の最も否定的な要素をなぞっているといえよう。メガリアンらは、自分たちが行っていることは「男性嫌悪」ではないと主張する。しかし、この極端な戦略は多くの人にとっては、イルベの「女性嫌悪」と同じものとして認識され、本来の意図は全く伝わっていない。それを「男性嫌悪」として受け止める人々が多く存在する場合、これは、男女の対立構造をより悪化させるきっかけになりうるのではないだろうか。

4-3. フェミニズムは誰のものか

韓国では多くの人——甚だしくは女性でさえも——がフェミニズムを男性を排斥するもの、更には女性利己主義として理解している。このような認識は主にテレビや新聞、インターネットのようなメディアにより根付いたものといえよう。伊藤 (2009) は、フェミニズムは男社会を一方向的に批判するだけというイメージが、様々なメディアによって生まれると指摘する。確かに、初期のフェミニズム運動には男性を敵視する風潮が存在し、今日のフェミニストの中にも、男性を敵として認識している人が存在するかもしれない。しかし、フェミニズムに対する考え方は極めて多様である。男女の平等を訴えるフェミニストもいれば、女性が権利を手に入れられるようにシステム自体を変えなければならないと訴えるフェミニストもいる。一つ確かなことは、フェミニズムは「両性」のための性平等運動であり、女性の権益向上は性平等を実現する手段の中の一つに過ぎないということである。

男女が不平等な社会で、抑圧を受け苦しめられるのは女性だけであろうか。実は、男性も両性が平等ではない社会の中で苦しんでいるのではないだろうか。女性が働くにあたって、様々な障壁が存在する社会では、結局男性もその負担は背負わざるをえない。例えば、OECD が毎年実施する女性の社会参加や職場内での昇進を妨げる社会的障壁を表す

「Glass Ceiling Index」において、韓国は常に OECD 会員国の中でも最下位に位置している。2014 年の調査では、1 位のフィンランドが 100 点満点の中 80 点を獲得したことに對して、韓国は 25.6 点というスコアを出した (The Economist 2015 年 3 月 5 日)。その中でも、正規職 (full-time job) での男女の賃金格差は最も大きく、OECD が発表した「Gender wage gap」調査によると、2013 年の男女の賃金格差は 36.60% であり、2000 年の 41.8% からあまり変わってないことがわかる (OECD)。一部の人は女性の賃金が男性に比べて少ない理由を、女性が男性に比べて比較的賃金の低い職種に就いているからであるというが、女性自身による問題というより、出産及び育児による職務経歴の断絶、男性が女性より賃金の高い職業に就きやすい社会の構造自体に問題があるのではないだろうか。このような社会構造の中、男性は一家の経済的な面を支えなければならないという責任感を持つ。一家の稼ぎ手という役割が生きる動機となり、自分のアイデンティティとなっている男性も多いだろう。そのような男性の多くは、大体の時間を仕事に割き、家族とともに時間を過ごすことができない人も多いため、中には家族から疎外感を感じる人もいる。その中、経済不況とともに、定年になる前に退職を迫られ、再就職しようとしてもなかなかうまくいかない中年の男性が増えている。近年、退職後自殺する中年男性の記事を目にすることが多い。仕事を辞めるとともに生きる動機とアイデンティティを失った彼らの中には、自分の存在価値を見出せず鬱病になり、極端な場合には自殺を選択する人も増加している。

ウ (♀, 2009) は、「日本や韓国のように男性と女性の間の性役割の規範が相対的に厳しく決まっている国の場合、仕事と家族の間の役割調整が難しいため、高学歴の女性は仕事と家族形成を並行することは簡単ではない」と述べている (p. 29)。女性は男性と同様に数年に至る求職期間を経てやっと入社した会社を、出産・育児のせいで辞めなければならない。しかし、子供がある程度大きくなり、育児を終わらせたあとは、生計のために就業しなければならないわけだが、大学を卒業した高学歴の女性であっても、専門職でない以上、就ける仕事は低賃金で労働集約的な仕事がほとんどである。男女の性別役割が厳しく決まっている現在の社会構造の中では、女性も男性も苦しめられるだけである。

5. おわりに

昨今の韓国社会に蔓延している「女性嫌悪発言」は、ミソジニーの定義は様々ではあるが、女性そのものを憎しみ嫌う「ミソジニー (Misogyny)」というよりも、依然として韓国社会に残留している家父長制の影響下で、経済不況に直面した青年層がフェミニズムを誤解していることから生まれた「アンチ・フェミニズム (Anti-feminism)」によるものではないだろうか。

「女性嫌悪発言」が抱えている最も大きな問題は、「嫌悪」がまた新たな「嫌悪」を生み

出していることである。現状を打破するためには、フェミニズムに対する認識を変えることが何より必要だ。フックス (Hooks, 2003) は、男性が仲間として闘いに加わらないかぎり、フェミニズム運動は前進しないと指摘し、更には、そうなるためにはフェミニズムとは男性に反対するものだという、文化的に作られた心理に深く根ざした思い込みを変えなければならないと主張する。現在の男女対立の問題は、加害者と被害者が存在する問題ではない。「フェミニズムはみんなのもの」というフックスの本のタイトルのように、我々はフェミニズムが女性だけのためではない、みんなのためのものということに早く気づかなければならない。

注

書籍等にて正確な定義が存在しない用語である場合、著者の主観による解釈をしている。

- 1) 概念のない女性のことを指す言葉で、その反対語は「概念女」。両方ともインターネット用語として使われはじめたが、今ではテレビや新聞などでも使われている。「概念女」の定義ははっきり定まっていない。世論での使われ方としては、ブランド物などに浪費せず、愛国心を表し、男性のことをよく考える女性などを「概念女」と呼ぶ。しかし、概念女として挙げられる女性の間に共通点はなく、時代の流れによって対象は変化する。
- 2) カンナム美人ともいう。江南（ソウルのハン川の南の地域）に整形の病院が多いことから、整形した女性を指してカンナム女と呼ぶ。
- 3) Mrs.Kim という意味で、女性、初心者 of 運転者を貶す言葉。
- 4) 韓国には된장 (味噌) と大便の見た目が似ていることから、「大便なのか味噌なのか識別できない」という諺が存在する。「味噌女」はこの諺から由来したという説や内面は味噌のような在来種であるのに、海外の流行だけを追う女性を批判しているという説も存在する (경향신문 2006年8月6日)。
- 5) 公式的な統計には集計されないが、事実上失業状態である人を失業者としてみなし、算出した実質的な失業率 (연합뉴스 2015年10月25日)。
- 6) 「メガリア」が初めて形成されたのは、DCinside というコミュニティの「MARS ギャラリー」である。韓国では MARS は「メルス」と呼ばれるため、その頭文字である「メ」と、メガリアの主な戦略である「ミラーリング」が、現在の社会に根付いている性的役割が完全に逆になるイガリアという空間を舞台とするノルウェーの作家 Gerd Brantenberg の小説「Egalia's Daughters : A Satire Of The Sexes」と似ていることから、小説のタイトルである「イガリア」をとった (メガリア)。
- 7) 本人の同意なしで撮られた性行為の動画などが不法に見られるサイト。その動画をアップする人は、恋人や夫などであり、女性の私生活の侵害で大きく問題となっているが、海外のサイトを経由している上に、そのサイトのアドレスが頻繁に変更されるため、根絶が難しいと言われている。
- 8) メガリアが独自のサイトを作る前に属していたコミュニティで「キムチ女」は許容されたのにもかかわらず、「キムチ男」という言葉は差別用語として禁止になり、その代わりとして作られた言葉。由来は不明確であるが、「キムチ女」と似た使い方をされる (メガリア)。

引用文献

日本語文献

- [1] 伊藤公雄 (2009) 『「男女共同参画」が問いかけるもの～現代日本社会とジェンダー・ポリティクス～』インパクト出版会。
- [2] 朴京淑・山根真理 (2007) 韓国女性のライフコースと仕事・家族役割の意味. 落合恵美子・山根真理・宮坂靖子 (編著) 『アジアの家族とジェンダー』勁草書房。
- [3] フックス, ベル著 堀田碧訳 (2003) 『フェミニズムはみんなのもの—情熱の政治学』新水社。

[4] 松村明 (2012) 『大辞泉【第二版】上巻』小学館.

英語文献

[1] The Economist 홈페이지 (2015.3.5) 『The glass-ceiling index』 <http://www.economist.com/blogs/graphicdetail/2015/03/daily-chart-1> (액세스 2015/10/28).

[2] OECD 홈페이지 『Gender wage gap』 <http://stats.oecd.org/index.aspx?queryid=54751> (액세스 2015/10/28).

韓国語文献

[1] 김기탄·최기호 (2009) 『대중문화 사전』 [大衆文化辞典] 현실문화.

[2] 경향신문 홈페이지 (2006.8.6) 『[문화수첩] '된장녀'가 어쩔다고...』 [[文化手帳] '味噌女'가何か悪いことでも...] http://news.khan.co.kr/kh_news/khan_art_view.html?code=960100&artid=200608061723321 (액세스 2015.12.05).

[3] 동아일보 [東亜日報] 홈페이지 (2014.2.12) 『소외된 젊은 보수 의 놀이터인가, 맹목적 반진보의 아지트』 [疎外された若い保守の遊び場か、盲目的反進歩のアジト] <http://news.donga.com/List/3/0318/20130530/55509300/1> (액세스 2015/11/29).

[4] 메갈리아 [メガリア] 홈페이지 www.megalian.com (액세스 2015/12/5).

[5] 박인혜 (2011) 『여성운동 프레임과 주체의 변화』 [女性運動のフレームと主体の変化] 한올아카데미.

[6] 시사 IN (2015.9.12) 『여성혐오의 뿌리는?』 [女性嫌悪の根本は?].

[7] 연합뉴스 [連合ニュース] 홈페이지 (2015.10.25) 『한경연 “고학력 남성 청년층 체감실업률 27.9%”』 [韓経連 “高学歴の青年層男子の体感実業率 29.7%”] <http://www.yonhapnews.co.kr/bulletin/2015/10/23/0200000000AKR20151023171300003.HTML?input=1195m> (액세스 2015/10/25).

[8] ohmynews 홈페이지 『여자들을 혐오한 '남자들의 습관'』 [女子を嫌悪した '男子らの習慣'] http://www.ohmynews.com/NWS_Web/View/at_pg.aspx?CNTN_CD=A0002146825 (액세스 2015/10/19).

[9] 우해봉 (2009) 교육이 초혼 형성에 미치는 영향: 결혼 연기 혹은 독신? [教育が初婚形成に及ぼす影響: 結婚延期或いは独身?] 『한국인구학』 [韓国人口学] 32: 25-50.

[10] 윤보라 (2015) 김치녀와 별거벗은 임금님들: 온라인 공간의 여성혐오 [キムチ女と裸になった王様たち: オンライン空間の女性嫌悪] 김수기 (編) 『여성혐오가 어쩔다구?』 [女性嫌悪がなんだって?] 현실문화.

[11] etoday 홈페이지 (2015.8.5) 『김치녀와스시녀그리고 '양성평등'』 [キムチ女と寿司女そして '两性平等'] <http://www.etoday.co.kr/news/section/newsview.php?idxno=1175800> (액세스 2015/11/29).

[12] 정희진 (2015) 언어가 성별을 만든다 [言語が性別を作る] 김수기 (編) 『여성혐오가 어쩔다구?』 [女性嫌悪がなんだって?] 현실문화.

[13] 韓国統計庁 (2015) 『2014 한국의 사회지표』 [2014 韓国の社会指標].

